

## 知的障害者のデス・エデュケーション構築の試み（２） ーグループワークを通してー

石 野 美也子      張      貞 京

知的障害者のデス。エデュケーション構築の試み（２）として、S施設の利用者のグループワークを中心に分析。一人ひとりが仲間の「老い」や「死」をどのように乗り越えようとしているかを「本人の語り」を通して考察し、さらに自分自身はどのような不安を抱いているかを知ることによってサポートの方向性を考える。

キーワード：デス・エデュケーション、グループワーク、知的障害、仲間、不安

### 1. はじめに

前回の「知的障害者のデス・エデュケーション構築の試み」（石野、張2010：67-74）<sup>1)</sup>においてS施設の取り組みについて不安の発見から不安軽減の取り組みに至るまでの過程を見てきた。

「傾聴」「受容」「共感」という一人ひとりに寄り添うという取り組みが個人の自己決定に至るまでの成長を支えているということが解ったことを受け、本稿では利用者の人々が仲間の死や老い、また、自分の今後のことについてどのように向き合っているかを考察したものである。

アルフォンス・デーケン（Alfons Deeken）（1984：103）<sup>2)</sup>は老年期について次のように述べている。「我々は努力の重点を外面的なものから次第に自己の内面へと移し、人生全体が内面への道をたどるように新たな目標を定める必要がある」この言葉の意味を平均年齢が60歳を超えてきた知的障害者施設、S施設の人々で考えると「仲間」との関係を通して「内なる自分」

を見つめていると感じられる。

それは仲間の「老い」や、「死」に直面し、その悲しみや不安を仲間や職員と共に乗り越える中で、その意識は自己に向かうのではないか。

本研究の目的として「本人の声を聴く」ということがある。

知的障害者の人々に関しては、その障害により自分で語ることが難しいのではと本人ではなく親や職員の心配、不安、こう思っているのではという周囲の声を聴くことに終始することが多い。それは先行研究からも明らかである。それは大切なことではあるが、何より本人がどう思っているのかということを知ることは今後のサポートにおいても大変重要なことである。

誰もが「自分はこうしたい」「自分はこう思う」ということを聞かれる機会があることはあたりまえのことではないか。

特に本研究のように「死」や「老い」に対してどう考え、仲間や家族などの身近な人の死をどう乗り越えているかというライフステージの中でも最終的な段階について、自らの考えや望みは尊重されるべきである。

上記の考えに立ち、本稿では小集団によって

起こる相互作用や話の広がり視野に入れてグループワークを行った。それを分析し、仲間の死や自らの老いとどのように向かい、乗り越え、また時には不安の中にいるのかということを考察する。

## 2. 研究方法

S施設に入所する利用者の方で、「死」や「老い」「不安」ということを語ってもいいという方をお願いし4回にわたり、グループワークを行った。

語り合うことによってここにある不安や悩みを少し和らげられるのではないかという点でグループワークに着目した。その経緯として、ある日、利用者の方と何気ない話をしていて、仲間の死が話題になると、どこからともなく集まり、自分の両親のこと、また仲間の死について病気になったときからどのようなことを気にかけていたかを積極的に話し始めてくれた。その様子を見て、「死」という直面しがたい問題や自分の「老い」という受け入れがたい不安を語るとき、個別に聞くことも意味があるが、グループでいることで少しでも不安が減少し、語りやすくなるのではと感じた。

そこで、まず始めにグループワークにより、それぞれの抱える思いを自由に語ってもらうこととした。このグループワークは、今の思いを表出することで少し前進できればというケア的な意味合いを持ったものでもある。

グループワークは4回にわたり、以下の通り行った。

第1回…2010年9月28日（土）

参加者はワーカーと記録者、および8名のメンバーで実施。

第2回…2010年11月27日（土）

参加者はワーカーと前施設長、および3名のメンバーで実施。

第3回…2011年7月16日（土）

参加者はワーカーと記録者、および3名のメンバーで実施。

第4回…2011年8月27日（土）

参加者はワーカー、および3名のメンバーで実施。

第1回目は、積極的な意見が多く見られたが、やや人数が多く、一人ひとりの意見を聞ききれなかったという反省のもとに2回目からは3名とし、同じメンバーで4回まで続けた。

記録の方法として、メンバーの同意を得て、録音し、それをテープ起こしした。

倫理的配慮として、氏名、および施設名、所在地などはイニシャルとした。

## 3. グループワークにおける考察

グループワークの内容の分析方法としてキーワードに沿って大きく6つに分類した。

- ① 仲間の身体の変化について感じる事。
- ② 職員に対する思い。
- ③ 保護者や周囲の人々との関係。
- ④ 亡くなった仲間への思い。
- ⑤ 自分の身体や仕事などの不安。
- ⑥ 自分の死への不安。

上記の6つのキーワードに沿って心の動きがみられるものをいくつか抜き出して分析する。

分析の順序は①～⑥の順に行う。

まず、身近な仲間の変化、職員や保護者、その他周囲の人々への思いを通して仲間との別れとどう向き合うか、そのことから自分の身体や仕事などの不安、死への不安をどう感じているかを考察する。なお、逐語録のまま使用するが

補足の必要なものは（ ）内に記した。また、発言者は①②というように表し、同じ項目で複数の発言があったときは○で表した。

仲間の身体の変化について感じること
<p>①やっぱり2人の方が（いい）。Sさんと一緒だし、Sさんもお仕事やめはってからお布団もあんじょうかぶれないし、私が時々ね、お布団かぶせてあげたりしているから。やっぱり2人部屋の方がいい。</p> <p>②今まで元気だったのにあんなになったらかわいそう。</p> <p>③MちゃんやIちゃんがなくなってからよ。がっかりしはって。（なぜ友人が急に弱ったかという説明）</p> <p>④（話すことが難しくなったCさんが、自分の言葉が人に伝わりにくいということを悩んでいるということを受けて）</p> <p>○ でもこれだったら全然ね。（わかる）</p> <p>○ 聞こえるね。わかるわ。</p> <p>○ Cちゃん、話すのも大事と思う。</p>

①～③はともに生活しているものとしての気遣いが見られる。また、①についてはSさんの大変さに自分を重ね合わせ、不安と心配の入り混じった感情が汲み取れる。

③においてはいつもお互いを気かけながら日々を過ごしているからこそ、なぜ元気をなくしたかということに気付く言葉である。

④では励ましたり、支えあったり、相手の立ち場に立つことが自然にできていることが表れているフレーズである。

職員に対する思い
<p>（妊娠している職員Nさんに対して）</p> <p>①Nさんと相談してんだけど、Nさん赤ちゃんができるから頼りにしてはできないけど、私一人で頑張れるとこまで頑張ろうと思う。Nさんばかり頼りにしてられないから。</p> <p>②（妊娠している職員Nさんが車椅子へのトランスファーをすることについて）</p> <p>○一番大変なのは、もしNさんだったらできないから。（妊娠しているので気遣っている）</p> <p>○無理やから。それがだめだから（Nさんのことを）気を付けてあげないと。</p> <p>○「おなかに（悪いから）やめてね」って言うてんねん。</p> <p>○Nさんには（危険だから）やめてほしいよね。</p> <p>③職員さんのこと手伝おうと思って。</p>

これは、自分の不安を相談している話題の中で出てきたNさんのことについての思いである。①②は妊娠している職員Nさんに対して細やかな心配りが感じられ、自分のことにように心配し、また年長の者として気を付けてあげなければという気持ちが強く表れている。Nさんについてはグループワークの中で続けて話題になった。みんながとても心配していることが伺え、生活を共にするからこそ生じる感情が読み取れる。

また、③については「気を付けていること」という質問に対して、思い浮かんだことである。自分の身体ではなく、様々な表現で「職員さんを手伝いたい」と話しており、支えられるだけの存在ではなく、自らも支える存在であることを示している。

「不安なことは」という質問に対し「今、こういう施設に入って幸せ」「今はここを自分のおうちやと思って楽しんで、毎日楽しんで暮らしているんで」「身体じゃなく、人形も作りたいし、お仕事のこともある」「友達がいて楽しい」と現状に対しての意見があったことも特筆すべきことである。不安がないというのではなく、集団の中で支援したり、されたりするという関係の中で不安を乗り越えているのだと感じられた。これらのことは直接、固有の職員との関係ではないが、職員への思いを感じられる表現でもある。

保護者や周囲の人々への思い（保護者）

- ①（箸を持ってきてといってもさっさと歩けなくなったIちゃんとお母さんについて）  
○Iちゃんのお母さんも一人やし気にしはったらかわいそう。  
○心配するから言わ（れ）ないけど。  
②（体が弱ってきたIさんについてWさんのお母さんが）  
○「お母さん、いつも気にしてるねん。Iちゃんこの頃どうしてるって言ってね」  
○「帰るたびに聞くの。心配して。私のお母さんがよ」  
③（亡くなったMさんのお母さんの誕生日にバースデーカードを送ったことについて）  
○Mちゃんのお母さんに誕生日にMちゃんは天国へ行ったけど（自分たちから）カードを書いて渡した。

①は保護者の方に対する心配りが表れており、また「Iちゃんのお母さんは一人だから」というところに日常のかかわりの深さが伺える。

②は保護者の方も自分の子供だけでなく利用

者の方に気を配っているという関係性が表れている。

③はS施設では利用者の方が亡くなった年の母の日には他の利用者の方からカードを送ることになっている。その時の親を思う気持ちが日常に生かされ、母の日ではなくてもお誕生日にカードを送るという行動により、お母さんを励ましたといえる行動である。

保護者や周囲の人々への思い

（周囲の人）

④（お点前を始めるきっかけ）

○はじめね、安寿さんがみんなにお点前をしているときに何をしているのかねって思って、私はじめお点前（クラブ）に入っていなかったの。ほんなら安寿さんが「片手でもお点前できるから入ってみたら」って言わはったから入ってみたの。あのう、お茶碗拭くことはできないけど。袱紗さばきもできないけど（やってみたら）って言わはったから入ってみたの。

⑤（難しいことに挑戦するとき）

○Mさんが「それ、やってみたら」と言わはった。私にできるかな（と思っていたら）「できる。Hちゃんならできるわよ」と言われて。

④⑤の二つは、周囲の人々とのかかわりによって、自信のなかったことが、その励ましによって一步を踏み出すことができたという。グループワークの中で文化祭の話になり、お点前をなぜ始めたかということにつながった時の言葉である。日々の生活の中で迷ったり、悩んだりした時に少し背中を押されることによって世界が広がる体験ができるということをあらわしている。職員や保護者だけでなく外部への広がり

の重要性を示す言葉でもある。

ことである。

亡くなった仲間への思い
<p>①（友達が次々に亡くなることについてワーカーに尋ねられて）</p> <p>○やっぱり一人ずつ友達がなくなると寂しい。</p> <p>○もっともっと生きていてほしかった。</p> <p>○YさんとはO市（S施設の移転する前の住所）の時から一緒だったのでとてもさみしい。</p> <p>○（急に亡くなった友達について）急でびっくりした。寂しいなと思って。あの部屋も寂しいわ。（お友達がなくなって）</p> <p>○私ものがっかりして寂しいなと思ってるけど、私も自分で頑張ろうと思っている。</p> <p>②（お別れについて）</p> <p>○Tさんのお母さんはS施設が好きだったから（Tさんが）S施設でお葬式やってもらったんよって言ってた。</p> <p>○最後まで立ち会わせてもらったんよ。</p> <p>○Iちゃんと会えたよ。（最後お見舞いに行って）</p> <p>○Iちゃんはお点前の着物着てた。（お点前の着物を着せてもらい棺に納められた）</p> <p>○お別れした。焼き場までついて行った。Mちゃんの時に。</p>

①では昔から共に暮らしていた友達が次々に亡くなることへの寂しさが、部屋を見て思い出されたり、もっともっと生きてほしかったという思いを日常的に持っているとともに、それを乗り越え、寂しさは寂しさとして、自分も頑張らなくてはという思いも見えてくる。

また、「立ち会う」「焼き場」「お別れ」という言葉に象徴されるように亡くなった友を見送ることもデス・エデュケーションとして重要な

亡くなった仲間への思い
<p>③（病気によって間もなく亡くなることが分かっていた友達Mさんへの思い）</p> <p>○夏休みに帰る前に「Mちゃん、私たち今日帰るから元気でね。私が帰るまで長生きしてね」って言ったの。（Mさんはみんなが帰省中に亡くなった）</p> <p>○（亡くなると分かっていたどのように過ごしたかということに対して）</p> <p>元気な時はみんなでトランプをしたり、それからみんなとお仕事をしてはった。</p> <p>Mちゃん織物してはったから。お点前の袋。（なつめを入れる巾着）いろんな絹糸で模様を作るの。</p> <p>（病気になってからも仕事をされていたんですか？）</p> <p>○してはった。</p> <p>○入院してて帰ってきたときみんなが「お帰り」と言ったらMちゃんが「ただいま。みんな元気？」と言って。Tちゃんたち何人かでベッドに寝かせて。それから中に入って「Mちゃんどう？」と言って「お帰り」って言ったら「ただいま」ってその時は元気だった。</p> <p>○（亡くなる前の年のクリスマス）</p> <p>Mちゃんはおばちゃんがたべさせて、私はMちゃんを見ながらおいしく食べたの。Mちゃんもプレゼントをもらって</p> <p>サンタさんと写真を撮ってはったの。</p> <p>○Mちゃんは「お姉さんになってあげる」言うてね。それがうれしかったの私。</p> <p>私のお姉さんがなくなってからそういうことがあったから。</p>

③の病気で亡くなると分かっていたMさんに対して、Mさんが元気な時はみんなで話したり、仕事をできる範囲でしたり、またクリスマスのような行事に皆のところへ行けなくても一人になることはなく、友達と一緒に食事をして過ごし、残りの時間を有意義に過ごしていたことが分かる。それは職員の配慮とともに、一つひとつの言葉の中から、利用者の人たちがいつもMさんを気にかけながらいたことが分かる。特に帰省のように長く会えないときは心配していたことが分かる。

またMさんもみんなが元気を気遣い、また、「お姉さんになってあげる」と励ましたり、してきた生活がある。

お姉さんになってあげるといわれたということAさんは第1回と第2回のグループワークで述べていることから、大変うれしいことであつたと同時にそのMさんの死はAさんにとって大きな喪失感であることが理解できる。

このように、一人ひとり悲しい時もうれしい時も仲間と共に育ち、そのことは最後の時まで変わることなく続けられている。

#### 自分の身体や仕事への不安（1）

- ①私だんだん手が震えてねできなくなってきたからみんなに助けてもらってるけど結び織がしたいというのを思っているけどだんだんできなくなるのが不安でたまらない。
- ②胃潰瘍ってどのくらい大きくなるんですか。
- ③心臓発作にならないように気を付けている。

①では、これからどうなっていくかわからない体力への不安が、仕事ができなくなっていく

ということにつながり、二重の大きな不安となっているということがわかる。

誰にとっても、仕事は自分の存在を証明する一つの手段である。それができなくなつたらと思うと非常に大きな不安を抱えていることが分かる。それは②③についても言い表せない不安を感じていることが分かる。

#### 自分の身体や仕事への不安（2）

- ④（先に亡くなった友人を見て、不安になるから気を付けていること）
- こけないように気を付けている。
- 歩くようにしている。
- あまり無理しないようにしている。
- 自分の身体が悪くならないようにRちゃんみたいになつたら大変だから。自分の身体は自分で考えている。

元気だったころから、少しずつ弱っていく仲間の姿を見て、最終的にはなくなるということを考え、できるだけ自分のことは自分で頑張ろうということが表れている。

#### 自分の身体や仕事への不安（3）

- ⑤夏の間は気持ちがしんどくなる時があるし、それをどうしたらいいのかを相談したい。
- （上記の悩みに続いて）お習字ね、元気のいい時は行けるんだけど、今はちょっと行く状態じゃないから。行きませんで断っちゃった。
- やめるってことはできないの。お母さんが楽しみにしているから。
- ⑥言えないんだよね。自分でしんどいって。

⑤においては、しんどくなって、何か行動に

移したいけど移せないことがあることに対する悩みを持っており、かつ、周囲の期待に応えたいという思いが表れている。

⑥においても自分がしんどいということで周囲に心配や負担をかけないかということを気にかけている。この辺りは老年期の問題とともに生活年齢による周囲への気遣いがみられる。

#### 自分の死への不安

- ①呼びに行ったりなんかしないといけないうやろ。(今自分と同室の人が悪くなったりしたら)で、もし、倒れて私が死んでたら、もう私が見つからなかったらそのまんま。
- ②一人部屋やったら私が倒れていても誰も頼る人がないから。

自分の死への不安は、先の自分の身体や仕事への不安とつながる。特に死においては、集団で過ごしているにもかかわらず、もし誰にも知られなかったらという不安が大きい。

## 4. 考 察

上記において、6つのキーワードに沿ってグループワークの内容を分析した。

それぞれの分析結果から共通して言えることは、はじめに述べたように友人の「老い」や「死」を自分なりに乗り越える時点において、「自己と向き合う」ことを余儀なくされるということである。それは自分の仕事であったり、身体の変化であったり、自分の家族や自分の死について考えることにつながっている。その不安の中で揺らぎつつ、「自己と向き合う」ことは「他者への思い」へと広がる。それが友人の家族への配慮であったり、職員への気配り、また、友人関係の中でも広がりを見せてくる。しかし、

その中でも自分の死、特に一人で死んでいたらという不安が非常に大きく、かつ具体的に述べられている。その不安を和らげ、友人の死を乗り越えていくときに最も力になっているのは、仲間存在である。しかし、それだけではなく何か共に乗り越えるプロセスを考えることが必要である。今回、職員の方の協力を得てアンケートを実施した。その中で「身近な人の死を乗り越えるプロセス」という項目で利用者の方はいかにどのように身近な人の死を乗り越えているか尋ねた。その回答から「お葬式に行って、写真を見て、おうちに帰った時その人がいないというのを感じ、お墓参りをして受け入れていくと思う」「亡くなった顔を見る～葬儀、見送りをすることが第1ステップ」など「見送る」ということが重要だと考えられている。それはグループワークの分析結果とも一致する。分析結果では、利用者の方も「最後まで立ち会わせてもらった」とか「焼き場に行った」「着物を着ていた」など鮮明に「別れ」の瞬間を覚えていることから重要なステップであると思われる。

次のステップとして「語る」ことが挙げられる。グループワークを行うに際して「不安や辛いこと、自分が思っていること」を誰かに話すことで楽になるのではないかと。それも、グループワークという形で「聴く」ということを中心に行うことが重要ではないかという思いで始めた。その結果、分析をして、一つの反省点としては、グループワークの間隔の問題、特に仲間の死の直後にはためらわれたこと、はっきり仲間の死に触れることに戸惑いがあったことなどがあげられる。そのために焦点が定まらないものになったことは否めない。しかし、少数で語ることによって今の自分の思いを自由に発言できるのではないかとという点においては多くの意見が出て、それなりに思いを聞くことができた。

次のステップとしては、その一人ひとりの思いをどう受け止めつないでいくかという課題が残される。グループワークを行って発見した点として、「死」についても、語ることで大きく動揺することはなく、しっかりと回想し、自分の不安も話してくれた。このことから、仲間の死から数週間経ったところに1度、思い出しながら語るためにグループワークが必要ではないか。一番不安になるころにこそみんなで語ることが必要と思われる。また今回は3名を中心に行ったが、今後、できる限り広く、また、言葉で表現しない人々にとっての方法論も考えていかなければならない。その一つの方法として、分析結果で利用者の方はそれぞれ仲間の人をよく受け止めている。その人たちの語りを通して言葉で表現しない人も、日常の中でどのような表情で、どのような悩みを抱えているかというアドボケートとしての語りがあってもいいのではないか。そのことが新しい仲間作りへとつながるのではないか。

施設というグループの場で暮らしていても誰にも知られずに死んでいたらと不安になるのであれば、地域に暮らす知的障害者の人はどうなのだろうか。障害の有無にかかわらず誰にも発見されなかったらと考えると不安になってあたりまえである。しかし、地域に暮らす知的障害者の人に相談できるコミュニティはあるのだろうか。そのことを考えると、今回の課題を次に生かし、S施設におけるグループワークでの「語り」を「死」や「老い」を乗り越えるプロセスとして一つのモデルを作ることで、他の場所でも生かしていくことが可能になるのではと考える。

(本研究は平成22, 23年度日本学術振興会、科学研究費助成事業における挑戦的萌芽研究(代表者張貞京)によるものである。)

#### (註)

- 1) 石野美也子、張貞京(2010)「知的障害者のデス・エデュケーション構築の試み—もみじ・あざみ寮の取り組みを通して—」京都文教短期大学紀要49
- 2) アルフォンス・デーケン(1984)『第三の人生』南窓社p130

#### (参考文献)

1. アルフォンス・デーケン(2001)『生と死の教育』岩波書店
2. アルフォンス・デーケン(2003)『よく生きよく笑い良き死と出会う』新潮社
3. 藤井美和・浜野研三・大村英昭・他編著(2010)『生命倫理における宗教とスピリチュアリティ』晃洋書房
4. やまだようこ編(2007)『質的心理学の方法』新曜社
5. 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社
6. 片岡靖子・長友真美・岡崎利治、他(2006)「対人援助職のデス・エデュケーションの必要性について(1)」—デス・エデュケーションプログラム開発の意義—九州保健福祉大学研究紀要7
7. 山本哲也(1999)「高齢者を対象にしたデス・エデュケーションの可能性」つくば国際大学研究紀要No.3
8. 社会福祉法人 大木会編(2004)『共に生きるあざみ寮・もみじ寮の50年・35年』